

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑫

* 悲しみの媚薬 狂おしき恋の味 *

緋月 まや

『ロミオとジュリエット』はきっと、世界で最も有名な悲恋の物語だ。イギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピアの戯曲で、十六世紀末のロンドン初演以来、世界各国の劇場で上演されてきた不朽の名作である。時はルネサンス幕開けの十四世紀、勢力を争って敵対する名家、モンタギュー家のロミオとキャピュレット家のジュリエットは舞踏会で出会い、一目惚れをする。ジュリエットは十三歳、ロミオはそれより少し年上という現代から見れば幼い恋人たちである。両家の和解を願う神父の立ち会いの下、二人は秘密の結婚式を挙げる。しかし、その直後、両家の若者の乱闘に巻き込まれたロミオは、ジュリエットの従兄を殺してしまい、まちを追放される。ジュリエットは両親に望まぬ縁談を押しつけられ、窮地に陥る。神父は二人の駆け落ちを助けようと一計を案じた。ジュリエットが薬を飲んで仮死状態になり、葬儀後にロミオと再会する筋書きであった。ところが、計画はうまく伝わらず、ジュリエットが死んだと思込んだロミオは、彼女の霊廟で自らの命を絶ってしまう。眠りから覚めたジュリエットは傍らで息絶えているロミオを見て、後を追う。なんとという無垢さだろう。この狂おしい恋の物語の舞台はイタリアにある。ヴェローナという名の美しいまちである。

ローマ帝国の栄華を映す二階建ての円形闘技場が見えてきた。その広大な古代遺跡アレーナ・ディ・ヴェローナを通り過ぎると、白と茶色の縞模

様が優美な中世の宮殿が現れた。これが、ヴェネト州が誇るヴェローナの魅力だ。様々な時代の建造物の宝庫として、世界遺産に登録されている。フィレンツェからは、イタリアの新幹線フレッチャ・ロッサに乗って一時間半ほど真北に向かう。



【右胸に触れると恋愛成就するとされるジュリエット像】

旅の目的は、ヴェローナ近郊の葡萄畑が生み出す「アマローネ」というワインをいただくことだった。手摘みの葡萄を陰干しし、糖度を高めてから発酵させるイタリア最高峰の赤ワインである。時に反則技とさえ形容されるその特別な製法で、他

のワインにはない甘美な味わいを醸し出す。フィレンツェのエノテカで心ときめく一本に出会って以来ずっと、いつか本場の味を確かめてみたいと思っていた。



(右)「ジュリエットの家」のバルコニー
(左上)「ジュリエット・クラブ」のポスト
(左下) カップルたちの錠前

おしゃれな雑貨屋が並ぶショッピングストリートを抜けてT字路を曲がると、この世紀の恋の物語の聖地「ジュリエットの家」の入り口が見えてきた。トンネルのような廊下の壁にハート型の錠前が連なり、永遠の愛を願って世界中から訪れた恋人たちの名前が記されていた。中庭にはジュリエットの像が立っていて、その向こうに、十四世紀の建築とされる石造りの邸宅があった。裕福な名家というイメージからすれば、質素に過ぎる印象だった。しかし、二階の一室から突き出しているバルコニーを目にした瞬間、ふいに劇中の台詞が脳裏に甦った。「おおロミオ、どうしてあなたはロミオなの」。舞踏会の後、部屋に戻ったジュリエットはバルコニーに出て、家名に阻まれた恋路を嘆く。この独白を、見つければ殺される命の危険を冒して彼女に会いに来たロミオが聞きつけ、二人はバルコニー越しに愛の言葉を交し合う。映画『ロミオとジュリエット』(1968年、伊英合作)では、ジュリエット役を演じた当時十代半ばのオリヴィア・ハッセーの可憐さが際立った、あの名場面だ。

ジュリエットは架空の人物である。それなのに、館の中に入ってバルコニーに立ち、ジュリエットの像を取り囲む彼女のファンを眺めていると、まる

で彼女が実在していたかのような錯覚を覚えた。実際、モンタギュー家とキャピュレット家のモデルとなった両家は中世に実在した。イタリアの詩聖ダンテも『神曲』の中で、両家の政争について言

及している。だが、ジュリエットのモデルとなった人物は確認されていない。モデルもないのに、イギリス人であるシェイクスピアがその悲恋の舞台を異国のまちヴェローナに設定したのは、この物語がイタリアの作家ルイジ・ダ・ポルトの『ロメオとジュリエッタ』を原型としているからだ。「ジュリエットの家」から十五分ほど歩いた教会跡地には「ジュリエットの墓」もある。ダ・ポルトがジュリエットの埋葬地としてい

る場所で、十八世紀には既にヨーロッパ中のジュリエットファンたちが墓前に押し寄せていたという。墓があるなら、家もなければならぬという順番で、観光ミュージアムとしての「ジュリエットの家」が整備されていくことになり、このバルコニーもファンの期待に応えるため、二十世紀になって取りつけられたのである。

バルコニーを出て屋敷の中を見学した。映画の撮影に使われた家具や衣装が展示されていて、その先に赤い郵便箱を見つけた。「ジュリエット・クラブ」と書いてある。このまちには「ジュリエットの秘書」と呼ばれる女性たちがいて、ジュリエット宛てに書かれた年間五万件にもものぼる世界中からの恋の悩みに返信する。これを題材とした映画『ジュリエットからの手紙』(2010年、米製作)では、ジュリエットの秘書という仕事に魅せられた主人公が、五十年前、駆け落ちを約束した恋人を裏切ってしまった苦悩を綴る女性からの手紙に返信する中で、自分自身と婚約者との関係を見つめ直す物語である。映画の中では、秘書たちによる様々な名言が繰り広げられる。「夫はワインのようなもの。熟成するには長い時間がかかる」と評した秘書もいた。イタリアのお国柄が現れた愛のアドバイスだ。

熟成ワインと言えば、まさに「アマローネ」がそうである。二年以上樽で熟成させた後、瓶詰めしてからさらに半年以上寝かせて市場に出荷される、手間暇かけて造られた高価なワインだ。気がつけば、そんなアマローネのことばかり考えて、とりつかれたかのようにヴェローナにやって来た私のこの症状は、恋の病にも似ていた。「ジュリエットの家」を出て、適切な店を探していると、「ワイン工房(Bottega Vini)」というレストランが目に入った。グラスのアマローネだけで十種類以上も置いてあった。値の張るものは、一杯三千円ほどした。高い——。けれどもう、それを飲みたいという気持ちを抑えることはできない。ヴェローナ名物の馬肉料理と共に注文した。グラスに鼻を近づけると、なんと妖艶な香りがした。舌触りは絹を思わせる優美さでありながら、アルコール度数が強い。濃縮された果実の甘みとビターチョコレートのような



【本場のアマローネ】

な苦みが混ざり合う。なるほど、アマローネの語源は「アマーロ(苦い)」な訳だ。ジュリエットの従兄を殺した罪で追放される前夜、ロミオはジュリエットの部屋に忍び込み、二人は結ばれる。アマローネは、その苦くも甘い愛の陶酔を彷彿とさせた。

障害があるからこそ燃えあがる恋愛心理は「ロミオとジュリエット効果」と呼ばれる。恋愛中の脳は、ドーパミンという快楽物質の濃度が上昇する。好きな人のことを考えるだけで気分が高揚し、思慮分別を失う。ドーパミンが理性を司る前頭葉の働きを鈍らせるからだ。そこに禁じられた恋という一匙の甘美な毒薬が盛り込まれた時、狂気は加速する。ただし、ドーパミンの高濃度状態は長くは

続かない。早ければ三ヶ月で消失する。ロミオとジュリエットも、もう少し時間をかけて愛を育てていたならば結末は違ったかもしれない。二人の恋は、出会ってから死に到るまでわずか五日間だ。電光石火の煌めきは、まさにドーパミンの効能だろう。冷静さを取り戻す間もなく、情熱の炎に焼かれて逝った。しかし、そこには、恋の歓びに震える思春期の心の息吹が描かれ、悲劇であるというのに悲壮感がない。イギリス・ルネサンスの中心にいたとされるシェイクスピアが、人間の心理描写に優れた戯曲家として名声を得た所以だろうか。神を中心とする中世の世界観から人間を中心とする古代ギリシャ・ローマの世界観に回帰しようとするこの文化運動なくして、文豪シェイクスピアはありえない。ルネサンスを生んだイタリアという国の文化の奥深さに、改めて目を見張る。

*

『ロミオとジュリエット』で神父が務めた役割を、その千年以上も昔のローマ帝国で行った司祭がいた。戦争が絶えなかったローマ帝国で、時の皇帝クラウディウス二世は兵士の結婚を禁じた。愛する人を残して戦地に赴いたのでは士気が下がるというのが理由であった。嘆き悲しむ恋人たちを見かねて、キリスト教の司祭ヴァレンティウス(英名バレンタイン)は密かに結婚式を執り行った。それが皇帝の怒りを買って、ついにこの司祭は処刑されてしまう。二月十四日のことだった。ヴァレンティウスを悼み、聖なる恋人たちの祭日が誕生する。つまり、イタリアはバレンタインデー発祥の地であり、正真正銘、筋金入りの愛の国なのである。だが、このバレンタインデー起源譚もまた、恋という光と背中合わせにある悲しい影を思わせる。映画『恋に落ちたシェイクスピア』(1998年、英米合作)では、シェイクスピア自身が許されざる恋に身を焦がす中、永遠の名作『ロミオとジュリエット』を完成させていく。恋は、悲しみという媚薬によってこそ、より美しく輝くものなのかもしれない。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

イタリアげんぱつ紀行 その4

カオルソで怒られる

二宮 大輔

カオルソ原子力発電所を訪れたのは 2023 年 9 月 17 日。前回のトリノ (Torino) ではなくトリノ (Trino) 原発を訪れた流れで、北イタリアにあるもう一つの原発にアプローチしたのだった。トリノとカオルソは距離的にはそこまで離れていないが、田舎から別の田舎への移動となるので四時間弱の長旅になってしまった。まずピエモンテ州の小村トリノから、同州第三の人口を誇るアレッシサンドリアへ電車で移動する。アレッシサンドリアからピエモンテ州の東の端つとルトーナで乗り換えて、エミリア＝ロマーニャ州ピアチェンツァ県の県都ピアチェンツァに到着したところで三時間ちよつとかかった。ちなみに、放射線量測定器があるので参考までに線量を測ってみたのだが、アレッシサンドリアが 0.14 マイクロシーベルト、ルトーナが 0.05 マイクロシーベルト、ピアチェンツァだけメモを残していなかったが、確か 0.15 マイクロシーベルトくらい。驚くほどの値ではなかったと記憶している。つまりどの町も気にならないほど低い値だった。

ピアチェンツァの鉄道駅から、東へ約 10 キロの距離にあるカオルソへは鉄道が通っているが駅は閉鎖中のような。どうやらバスが出ているらしいが、到着した日が日曜ということもあり出発時刻がよくわからない。カオルソ市内から原発へも、歩道のない道路が続くようなので、ここはピアチェンツァの駅前から一気にタクシーで原発を目指そうと、トリノにいるあいだに、スマホでウーバータクシーのアプリをダウンロードして、タクシーを予約してみた。ところが、いざピアチェンツァに着いて、ウーバーの予約を確認してみると「付近に利用可能なタクシーがありません」の表示が出てきた。知らない町で交通手段を絶たれた軽い絶望感を久しぶりに覚えた。そうも言っていられないので、すぐに気を取り直してタクシー乗り場に並ぶ。20 分ほど待って無事タクシーに乗ることができた。

日本でもそうだろうが、ウーバーはもちろん万能ではない。ローマやミラノなどの大都市では有効だが、人口 10 万人のピアチェンツァの規模でとなると、行先や時間帯によっては使い勝手が少し悪くなる。

さて、タクシーに乗り込んで「目的地はカオルソ。でもその前に原発に寄りたいんだけど……」と、おそろおそろ話を切り出すと、若くてイケイケのタクシー運転手はすんなり OK してくれた。車内でドーナヒップホップが流れるなか、タクシーで走ること約 20 分。原発の入口に到着した。当たり前だが、これまでの徒歩での原発訪問とは比べようのないほどの早さだ。タクシーを降りてひとまずスマホで写真撮影を……と思ったら、入口の守衛室から、警備員が出てきて声をかけられた。「そこで何をしている。写真を撮るんじゃない」。普通に怒られてしまった。これは今までに行ったラティーナでもトリノでもなかった対応だ。タクシーで来たのが逆に目立ってしまったのか。そう言われてしまったら仕方がないので、写真を撮るのを断念して、すかさず計測器を取り出し、さらっと線量だけは測定しつつ、警備員に尋ねてみる。「日本から原発の調査で来たのですが、中に入るにはどうしたらいいですか」。すると「SOGIN (核施設管理会社) のホームページに内部見学を受け付けるメールアドレスが掲載されているから、連絡してみたらいい」と親切に教えてくれた。計測器に目をやるとこちら最低値の 0.05 マイクロシーベルト。つまり空気はとてもきれいということだ。SOGIN の有益情報を教えてくれた警備員にお礼を言って、再びタクシーに乗り込むと、足早に原発を立ち去った。

第一の目的をいちおう達成して、カオルソ市内のホテルに到着した。変なお願いを聞いてここまで付き合ってくれた運転手にも感謝の意を述べて、タクシーを降りる。予約していたのは、正確にはホテルではなく、国道沿いのバル兼レストランの二階にある空き部屋で、おそらくは住み込み従業員用の余った一室だ。バルの裏口から二階に上がるため、まったくホテルらしくないのだが、部屋の窓を開けると、階下のテラス席に集ってカードゲームに興じる地元の老人たちの声が聞こえてくる。独特の生活感を醸し出しており、イタリ

ア郊外マニアの私にはなかなか魅力的な場所だ。そして何より、同じ窓から原発の白い円筒型の建屋が見えるのだ。ここはキューポラではなくて、原発が見える街といったところだ。



【宿泊した部屋のあるバー La Rocca】

ここでカオルソ原子力発電所の概要を紹介したい。イタリアで最後につくられた原発で、あるのは軽水炉一基のみ。1970年に建設がスタートし、1978年に送電網が整備され、1981年12月から商業運転が開始された。1986年4月のチェルノブイリ原発事故を受け、同年10月、わずか5年弱の商業運転の後、一時停止となる。イタリア国内の他の原発と同じく1987年の国民投票後に廃炉が決定し、現在はSOGINによって解体が進められている。また、冷却水が必要だったため、トリノ原発と同じくポー川沿いに位置していることにも留意したい。四つの州にまたがって流れる全長650キロのポー川沿いには、二つの原発があったのだ。

ここでも、もちろん核のゴミの問題が立ちはだかっている。カオルソ原発で出た核廃棄物は、いったんスロバキアの施設に運ばれて焼却処理される。こうしてボリュームダウンしたうえで再びカオルソ原発に戻され、最終処分場が決まるまで一時的に保管される。昨年12月に最終処分場の候補として51の地域がイタリア環境省から発表された。今年の3月まで立候補を受け付け、その後、最終処分地を絞り込んでいく。51の地域といっても、イタリア全土まんべんなく選ばれたわけではなく、主に南イタリアの洞窟都市マテーラ、ローマのあるラツィオ州ヴィテルボ、今回の旅でも経由

した北イタリアのアレッサンドリアの県内に候補地が集中している。つまり、すでにある程度の候補地が定まっており、ここからさらに詳細が決まるという段階に入っているのだ。

大きな注目を集めてもよさそうなニュースだが、やはりカオルソでも原発の存在は忘れられており、町を歩いてみると、平和で静かな小村の光景が広がっている。前述のとおり、肉眼で見える距離に原発があるのだが、不安感や問題意識も特にならなそうだ。ただ、カオルソがイタリア半島にある四つの原発のうち、最もチェルノブイリに近い位置にあるということもあり、当時はみんなが不安に苛まれていたという住民の声を聞くことはできた。

翌朝、帰途に就く。カオルソからピアチェンツァに戻って、電車でローマに帰る予定だ。宿泊したバーの近くに首尾よくバス停があったのだが、なんとその日はストライキで、公共交通機関は午前8時までしか動かない。再開は17時だという。そしてバスのチケットを買いたいのだが、そもそもこの町には売店がないし、前日同様、ウーバータクシーにも頼れない。いきなりのピンチに、再びイタリアならではの絶望感を味わいつつ、エミリア＝ロマーニャ州のバスチケットアプリ Roger をダウンロードする。そして、同じバス停で同じ境遇に陥った数人のカオルソ市民とともに、午前8時前に始発駅を出発したはずのバスを祈りながら待った。40分後、バス停の電光掲示板の到着予定時刻を大幅に過ぎてはいたが、午前中最後のバスがやってきて、事なきを得た。ピアチェンツァ＝カオルソ間のたった10キロの距離を往復するのに二つもアプリをダウンロードしたのだから、自分の準備の悪さに嫌になる。こうして無事ローマにたどり着き、日本に帰国できた。

さて、これでまがりなりにも三つの原発を見てきたわけだが、パターンが読めてきた。原発は、公共交通機関ではなかなか到達しにくい田舎町のさらに田舎にあり、いずれの土地も自然豊かで、郷土料理やワインも美味しいだけ。すでに述べたように、イタリアは1987年の国民投票を転機に脱原発に進み、再稼働の声や核廃棄物の問題はあっても、一部の人間を除いて原発は過去のものとして忘れ去られている。



【宿泊先の窓から見えるカオルソ原発】

実験炉や処分地はいったん置いておいて、残る訪問地はラツィオ州とカンパーニャ州を隔てる川沿いにあるガリリアーノ原発のみ。今回のイタリア滞在でトリノ、カオルソと行ったわけだが、次はやはり敷地内に入って見学してみたいという気持ちが大きくなってきた。地域住民に聞き取りをしても詳しく語れる人はなかなかいないので、専門家に話を聞きたいというもある。そのためには、カオルソの警備員に教えてもらったように SOGIN にコンタクトを取らなければならない。この原稿を書いている 2024 年 2 月 19 日現在、一度メールを送っただけだが、返信は来ていない。次回、果たしてガリリアーノ原発を見学できるのか、どうか温かく見守ってほしい。

(翻訳家、元当館語学受講生)

< 実用イタリア語検定 解説講座 >

～ 4・5級向け / 準2・3級向け ～

イタリア語検定 1 級保持者で、当館 YouTube チャンネル「知って得するイタリア語」でお馴染みの杉栄子先生が、実用イタリア語検定最新試験をわかりやすく解説します。

もちろん参加者からの質問も大歓迎。

また、今回受験されていない方も、次回受験を目指す熱心な方の参加もお待ちしています。

- ・日 時: 3 月 23 日(土)
4・5 級向け 13:00～15:00
準 2・3 級向け 16:00～18:00
- ・場 所: 日本イタリア会館 京都本校(対面のみ)
- ・定 員: 各回 10 名(先着順)
- ・お申込み: 当館ホームページ、お電話
- ・料 金: 2,000 円(一般)
1,000 円(当館会員、現受講生)
- ・参加特典: 2024 年春期イタリア語講座受講料を 2,000 円割引
(※新規受講登録の方のみ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>